同期

SHIRO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
同期

【Ｎコード】
Ｎ８２０３Ｘ

【作者名】
ＳＨＩＲＯ

【あらすじ】
「一之瀬は関本がいないと何もできないのか？」
切っ掛けは同期のこの一言。普段穏やかなこの同期が何故だか苛立った様子で僕にそんな事を言った。僕と関本と工藤は同期で、付き合いだって三年もある親友同士。いまさらそんな事を言われるとも思っていなかった同期の思いがけない言葉に戸惑いを覚えるが、おまけに「一之瀬のことが好きかもしれない」と告白までされた。
平穏な僕の日常がその事を切っ掛けに少しずつ変貌を遂げる。
同期の告白は行き過ぎた友情なのか？悩んだ末に僕が辿り着く先は

1（前書き）

ボーイズラブと言う括りにはしたくなかったのですが、同性に告白されると言うことで言えばそうなるのかな……一応Ｒ１５指定にはしてみましたがそんな際どい描写はない予定です。

1

「一之瀬は関本がいないと何もできないのか？」
キッカケは同期のこの一言だった。
普段はあまり感情を表に出さない、どちらかと言うと穏やかな同期が、この時は珍しく苛立った様子で僕にそんな事を言った。
それまでの話の流れを考えても、同期が腹をたてるような事を言った覚えもなかったし、いくら考えなしに思った事を口にする性質の僕だったとしても、あの時何が同期をあれほどまでに刺激したのかも分からなかった。
勿論同期だって人間だから、虫の居所が悪い時もある。三年も付き合っていれば、何度か『こいつ、今怒っているな』と思うような場面にも遭遇している。
だけどこの同期に限っては、相手がそれを嗅ぎ取った途端、実にさりげなくその場の空気を修正する事ができる男だった。
だからあの時の同期の言動には違和感があって、苛立ちを隠そうともしない事や、なんだかそんな自分に戸惑ってさえいる様子が、僕には随分奇異に映った。

関本と工藤。
撲とこの二人は同期の入社で、最初の導入研修のチーム別けの時から一緒で、不思議と気の合う三人だった。何十人といる同期の中で、同じチームから揃って同じ営業部へ配属ともなれば、なんだかそれだけでも運命的な出会いのように感じたものだ。
僕と関本が営業一課で、工藤が営業二課。
課は違っていても同じ営業部でフロアも同じだから、お互いに顔を上げれば視界にその存在を確認できると言う身近さだった。
愚痴を言い合ったり、落ち込んだ時には励ましあったり、それこそ最初のうちは昼も夜も三人で過ごしていた。社会人になって、多

分あの頃が一番楽しかった時代だと思う。
　三年経った今でも以前ほどではないにしろ、休みの前に三人で飲んで帰る事は頻繁にあるし、今でも困った時はお互いに助け合える仲間だ。特に僕は行き詰まると、必ずこの二人の同期に相談をする。大人になってから自分の弱い部分を曝け出すのは幾分勇気もいるが、この二人は絶妙な距離感と的確なアドバイスで、僕の一番の相談相手になってくれる。社会に出て、こう言う友人を持てたと言う事は、僕にとっては何よりの財産に違いない。
　確かに、学生時代にも友人は沢山いた。
小学校時代には小学校時代の友人。中学、高校、大学と。
　今でもそのうちの何人かは、たまに会って食事ぐらいはする。ただ、環境が変わるにつれて、以前の友人とは少しずつ疎遠になって行く。
　同じ年齢で同じ時代背景を生きて、始めて社会に出て味わう現実の厳しさや苦労を共感できる同世代の友人との出会いは、これが最後の機会になるだろう。だから、尚更この二人の同期をこれからも大切にしたいと思っていた。

　まず、この二人について、僕は特に分け隔てをすることなく付き合って来たと思う。どちらかがより気が合うとか、どちらかのこう言うところが嫌いだとかもなかった。ただ、関本との接点が多いのは確かだ。
　同じ課で机が隣同士と言うのもあるが、僕らは同じマンションの7階と4階に住んでいる。特に示し合わせたわけでもなく、会社から紹介された不動産会社の物件の一つが、利便性と立地条件と、2Kの新築と言いう又とない好物件で、偶然二人の目が留ったと言うだけだ。
　住まいが同じだと、出くわす機会は必然的に多くなる。
　朝、マンションのエレベーターで顔を合わせるのは、ほぼ毎日。特に待ち合わせをしているわけではないが、始業時間が同じだから

早朝出勤とかフレックスでもない限り、自ずと朝の行動パターンは同じになる。
僕は、朝の情報番組の『今日の占い』を見てから家を出るが、関本は『今日の占い』の前に家を出るらしい。タイミングとしたら、丁度エレベーターで出会う頃合いだ。
会社に着いたら着いたで、机は隣同士。
だから、仕事以外の雑談で盛り上がる事も多い。むしろ、そっちの方が多いかもしれない。それに机を並べているとお互いの仕事の進捗状況も分かってくるから、終わりそうならどちらともなく声を掛けて一緒に帰る。二人ともまだ気儘な独身生活だし、そのまま晩飯を食べるなんて日課のようなものだ。
特に意識してそうしているつもりはないが、いつの間にか関本と過ごす時間が多くなっていた。近頃ではほとんどが関本と二人でいるか、たまにそこに工藤が加わると言うパターンが、定着化していた。

そんな状況だったからこそ、あの時工藤に「今晩、飯でも行かないか」と誘われて、「構わないけど、関本の方はどうかな」と、僕は当然の如く『関本』の名前を口にしていたわけだ。
「関本か」
確か、そう言ったきり工藤は黙り込んだ。
僕はその時会議の資料作成をしていて、そちらに気を取られていたから、その前の会話もほとんど生返事で、『関本か』と言ったきりの工藤の言葉も、軽く聞き流していた。
それにしてもなんだか長い沈黙じゃないかと気付いた僕は、そこでやっと顔を上げて画面越しに工藤を見たような状況だった。
「関本がどうかしたのか？」
不思議そうに尋ねる僕を、まるで待ち構えていたようなタイミングで、工藤はあの一言を放った。
「一之瀬は関本がいないと何もできないのか？」

まさか同期からの思いがけない言葉だった。
そんな事を言われるとは思ってもいなかった僕は、正直なところ呆気に取られた。
「だって、いつも三人だろう」
まるで小学生のような台詞を言って、僕は唇を尖らせた。
普段それほど感情を現さない工藤にしては珍しく、その顔に苛立ちさえ見えるから、僕はますます混乱した。
「俺が誘うと、必ず関本って言うんだな」
少し早口で冷めたもの言いをする。こう言う時の彼は何かに腹を立てている時だ。三年の付き合いで撲もそれ位は分かっている。ただ、彼が腹を立てる理由が分からなかった。
だから、僕は余計に焦ることになる。
何が気に食わないのか？
関本がいたら都合の悪いことでもあるのか？
それならそれで、「一之瀬に折り入って話がある」とか、誘い方ならいくらでもあるはず。
それともそれまでの会話で、僕が彼を怒らせるような態度を取ったり、そう言った発言をしたりしたのだろうか？
確かに、熱心に彼の話に耳を傾けていたわけではなかったけれど、仕事中の雑談なんてそう言うものだと思う。
よっぽど虫の居所でも悪かったのもしれない。
いや、彼に限って理由なく他人に八つ当たりをするなんて尚更考えられない。
彼は僕と違って、遥かに人間ができている。
だとしたら他に思いつく理由はなんだって言うんだ！？
たとえば頼りない僕が身近な存在を良い事に、関本になんでも頼る傾向にあるのが、同じ同期としてはいかがなものかと、常々思っていたりするのかもしれない。
それなら多少なりとも心当たりがある。
居直る訳ではないが、僕の頼りないのは今に始まった事じゃない。

三年の付き合いなら、今更それに腹を立てるなんてよっぽど可笑しい。

僕はその時考え出せる理由を、ああでもないこうでもないと、ぐるぐる考えながら工藤の苛立ちの原因を探ろうとしていた。

そんな僕の困った様子に、工藤はふと我に返ったようだった。

「ごめん、牽制されてるのかと思って」

これまた訳の分からない事を言って、余計に僕を混乱に陥れた。

僕が工藤を牽制しなければならない理由がない。

いったい何に対する牽制と言うのだろう。

こいつ、『牽制』って言葉の使用方法を間違ってやしないか？

問い質そうとする僕の前で、工藤は一瞬だけ不安な顔をした。多分、そんな彼を見たのは始めてで、僕はこの状況に戸惑った。

「牽制ってどう言う意味だよ」

そして、僕は素直にそう訪ねていた。

工藤は少し考えた風に僕の顔をじっと見ると、困ったような眼をして撲に言った。

「気にするな」

そう言われて納得できるか？

僕は、大いに気になったし気持ちも悪い。

だが彼はそのまま決まりが悪そうに黙り込むから、僕は僕で勝手にこう推測してみた。

確かに、近頃は工藤と過ごす時間が少なくなっていた。自分が、彼の立場だったらどうだろうか。同じように三人で友情を分かち合っているつもりでも、どちらか一方に比重が傾いたら、どこかに嫉妬のようなものを感じるのは、何となくだけど理解できる。

僕らの付き合いに、『嫉妬』という湿っぽい言葉が適切だとは思わないが、工藤はどこかに少なからず、『疎外感』のようなものを抱いているのかもしれない。

そんな風に考えてみると、なんとなく解決策も見えてくる気がし

た。それこそ単純な撲は、急に工藤に優しくすればいいんだと思い立ったわけだ。
「関本と一緒じゃなきゃ嫌だって言ってないだろう。別に二人でもいいよ」
これは我ながらまずい言い方だった。その証拠に、工藤から帰ってきた返答は、「無理にとは言ってない」と、冷ややかなものだった。
考えたら、随分傲慢な言い方だったかもしれない。
考えなしに口にするこの性分が恨めしくなった。ましてやこんな時、この場を諌めるほど撲には気の利いた台詞も浮かばないし、結局どうしていいのか分からなかった。
「無理ってなんだよ」
変に意固地になって、ますます状況を悪化させるような事しか言えない。
困った僕は、ふくれ面でパソコンの画面を見つめる。
もちろんそこに答えが書いてあるわけでもないから、マウスを意味なくクルクル廻してみたりする。
工藤はそんな僕の態度があまりに子供っぽく見えたのか、微かに笑った。そのことで、張りつめた空気が穏やかに揺れるのを感じた。
画面から顔を上げて工藤を伺う。そこには見慣れた、いつもの工藤の顔があった。
「ごめん一之瀬、俺の言い方が悪かった。機嫌なおしてくれるか」
結局は工藤からの謝罪を聞くことになる。何時の時でも、彼はさり気なく僕が負担にならないような気配りをみせる。そう言うところに甘えているのだとは思うけど、僕はそれだけでホッとできる。
「一之瀬、何時なら終われそうなんだ」
と、優しく僕を促がした。
薄っすらと笑みを浮かべた工藤の口元を見つめながら、抱えている仕事の算段をする。
「七時ぐらいかな、多分」

「分かった、空けといてくれ」
そのまま工藤は軽く手を上げて席を離れる。残された僕は、なんだかスッキリとしないままその後姿を眼で追っていた。
結局のところ、これは二人で食事に行くってことだろうな。
どうも引っかかる。
何かあるのか？
今思うとあれは第六感とまでは言わなくても、この夜がどこか特別なものになりそうな、そんな予感めいたものが確かに存在していた。
だからって、あんな事が僕を待ちうけていようとは。
絶対、絶対、この時点で想像出来ないって！

2

自慢ではないが、僕は嘘が下手だ。
「一之瀬、ナニ食いたい？」
今日が給料をもらったばかりの金曜日だった事もあり、関本は当然の如く撲が断らないと言う前提の下、今晩の腹具合を聞いてくる。あの時の一件さえなければ、「今日は豪華に焼肉にするか？　じゃ、工藤にも声をかけとくよ」と、言うのが何時ものパターン。
でも、なんだか二人で行く事にあれほど拘った工藤の手前、関本にはそれが言い出せなかった。咄嗟にやったことが、止せばいいのに日頃吐きなれてない嘘を吐くことだった。
「ごめん、今日はちょっと」
「なんかあったのか？」
関本は気遣うように僕を見た。
誘われて断るなんて滅多にないから、仕事絡みで何かあるのかと余計な心配まで掛けさせたようだ。嘘をつくのは心が痛い。
「違うんだ。大学の友達と……久しぶりに飯でもって話になって」
なんだかソワソワとして、変な汗を掻きそうになる。
関本は勘が鋭いから、一瞬胡乱な眼つきをした。
生きた心地がしないとはこう言うことか。
でも、そこは僕と違って大人の彼は、「そうか、それじゃしかたないな。愉しんで来いよ」となにやら含んだような笑みで、案外あっさりと無罪放免にしてくれた。
第一段階はクリア。

僕に断られた関本は、当然の如くもう一人の同期を誘いに行く。工藤の席も、僕の所から見渡せる位置にあるから、その様子が逐一見て取れる。
残念ながら話の内容までは聞こえて来ないが、嘘をついている

身としては、内心ドキドキもので、こっそりと二人の動向を伺ったりする。
なにやら楽しげに笑っている二人。
工藤が一度だけ僕の方をチラリと見た。
言ってないよ、関本には。
ちょっと恨みがましい眼で工藤を睨む。
暫くして、「ちぇ、あいつにもフラれたよ」と、関本が肩を落として戻って来た。
そうか、工藤も言わなかったんだ。
なんだろう、このコソコソとした感じは。
これではまるで、社内恋愛みたいじゃないか。
一瞬、そんな風に考えた自分が馬鹿みたいに思えた。取敢えず工藤と二人で行くのは決まったとして、約束の時間までに火曜の会議資料作成に頭をシフトする。出来なければ、休日出勤は免れない。
仕事の遅い僕は焦る、慌てる、そして行き詰まる。

3

金曜日の夜ともなると、定時で潮が引くようにほとんどの社員が退社した。暫くは時間ばかりが気になって、チラチラと時計を窺っていた僕も、何時の間にか作業に没頭していたようで、結局は、突然鳴り出した携帯電話に、約束の時間を突き付けられた。

机に放り出していた携帯電話の震動は、小心者の僕を驚かせるには十分過ぎるほど破壊力があり、慌てふためきすぐさまそれに飛びついた。

「もしもし」

周りを憚るように、声を潜める。なんと言っても隣の席に、油断のならない関本がまだ残っていた。関本の奴、さっさと定時ダッシュをするかと思いきや、今晩のお相手を調達したようで、時間繋ぎかなんだかしらないが、急ぎでもない報告書なんて書いている。不器用な僕が、ここからさり気なく脱出できる確率はかなり低い。

『一之瀬』

工藤の柔らかい声が聞こえた。咄嗟に関本を見てしまって、慌てて顔を背ける。怪しいことこの上ない態度に関本の視線が突き刺さる。

そう言えば、あいつ、どうした？

慌ててフロアを見渡すと、既に工藤の姿は何所にもない。いつもなら一声掛けて帰るはずなのに、鮮やかに姿を消している。

すでに居なくなった工藤の席辺りを睨み、壁の時計に目をやる。約束の時間は十分ほど過ぎていた。

『出れそうか？』

工藤の気遣うような声がした。

「ああ、ちょっと待てよ」

慌てて席から立ち上がり、作りかけの書類を保存しつつ、忙しなく帰り仕度を始める。

「今、パソコン落としてる」
仕事は結局未完成のままだ。
火曜の会議までに間に合いそうにない。休日出勤は確定だろうな。
「やっとく事あったら言えよ。待ち合わせしてるんだろう」
携帯電話片手にバタバタと撤収中の僕に、親切心から関本が声をかけてくれた。
その声が工藤にも聞こえたのか、『関本も誘ったのか？』と、聞いて来た。いちいち反応しなくてもいいだろうに、僕はまたもや咄嗟に関本をチラリと見てしまう。
「いや、今何処？」
ちょっとぶっきら棒に答える。
工藤に場所を聞きながら、僕の様子を伺う関本には大丈夫だと手の平を見せた。
僕は携帯を肩に挟み、鞄の中に煙草とライターを放り込む。過ぎてしまった時計を睨みながら、上着に袖を通し、コート掛けから自分のコートを引っ掴み、机まで戻って施錠をした。
携帯電話は既に切れていたが、関本から余計な事を言われないように、そのまま耳にあてた状態で、怪訝な顔をした関本に『じゃあな』と、片手を上げて挨拶をして見せ、慌ただしく部屋を飛び出すと、エレベーターに向かって一目散に走り出していた。
『脱出作戦』なんとかクリア。

4

工藤が待ち合わせに指定した場所は、会社の傍にある小さな公園だった。位置的には会社の真裏にあり、正面玄関とも社員通用口とも接していない為、僕の意識の中にはその存在自体がほとんどないような場所だった。もちろん入社して3年にもなるが、僕は一度も足を踏み入れた事さえなかった。

どこか先に行って、店で待っていてくれたほうがこっちも随分気が楽なのに、工藤はなんだってそんな場所を選んだのか。

コートのポケットに携帯電話を握りしめたまま、僕は足早にエレベーターを降りる。

でもよく考えると、金曜の夜なら会社の近くの飲み屋は、社内の人間が誰か一人ぐらいは席を温めている。むしろ逆方向にあるこの公園は、案外隠れた待ち合わせ場所かもしれない。

そんな事を考えながら、社員通用口を出て駅の方角へ歩いていた。会社の前の道は、車道からひとつ中に入った筋にあり、駅へ向かう場合は一つ目の角を左に曲がって通りに出るか、このまま突っ切ってから広い通りから駅へと向かう。

今夜は右に逸れて待ち合わせの公園を目指している。後ろを振り返って、誰かいないかを確かめるほどの念の入れようだ。

同期との待ち合わせに、何を警戒しているんだろう。

日頃吐きなれてない嘘をつくと、小心者の僕はそれだけでも十分挙動不審人物になれる。

見慣れない夜の道は人通りがなくて、公園の入口付近は僕の背丈ぐらいの植栽がS字を描くように植えられている。外灯も心もとないし、なんとも薄気味が悪い。陰から誰か飛び出しでもしたら、僕は間違いなく腰を抜かすだろう。

くねった植栽を抜けると広場に出る。一旦中に入ると、どこにで

もあるようなすっきりとした公園で、僕は難なく工藤を見つけることができた。
大きな樹の下にベンチが3つ。
右端の一番明るい外灯の下に同期がいた。
彼は鞄を机にして本を広げて読んでいるようだった。
「眼、悪くなるぞ」
遅れて行ったわりには、僕はゆっくりと近付いて声を掛けた。
「上手く抜け出せたんだな」
そう言って、少し眼を細めて僕を見上げる。そんな工藤の顔は寒さのせいか、どこか緊張したような顔つきだ。何を読んでいるのか覗き込もうとする前に、本がパタリと閉じられた。
工藤はそのまま鞄に突っ込むと、「行くか」と言ってそっけなく立ち上がった。
僕も早くここから離れたいと言う気持に捉われていた。別に会社の近くで、同期と一緒にいるところを誰かに目撃されたとしても、それ自体には何の問題もない。ただ、関本に嘘をついたと言う事実が、僕を後ろめたい気持ちにさせていた。
「ちょっと歩くけどいいか」
僕よりすらりと背の高い工藤が、先に歩きながら振り返る。
「何処に行くんだよ。俺の知ってるところか？」
その背中に問いかけて、僕は彼の後に従う。
「三人で行ったことはなかったと思うが」
工藤はそう言ったきりしゃべらない。
なんだかこう言うパターンは初めてで、どこか違和感がある。
だいたい三人で飲んで帰る時は、ほとんどが会社と駅までの間にある往きつけの店で、その日の気分でどれかに決める。まず、駅の反対側へ足を延ばすと言う選択肢がない。それに今夜は見慣れない景色と、何処か様子の違う工藤と、嘘まで吐いて待ち合わせた事に対する罪悪感に、僕はたぶん戸惑っていた。こんな状況は今までなかったし、どうにも落ち着かない。

この漠然とした落ち着かなさの正体の一つが、彼に対する警戒心の現れである事には間違いなかった。昼間の態度からして変だったし、今もどこか違った空気を纏っている。
「関本に何って言った」
僕があんまり黙り込んでいるから、工藤はちょっとからかうような目で振り返った。
「おまえがあんな事言うからだろう」
僕の方は、恨めしい眼で工藤を見る。
「嘘ついたのか」
工藤が意地の悪い事を言う。
「だってさ」
焦った僕の姿を思い出し、罪悪感で気分が落ち込む。
「悪かったな。言えば良かったのに」
工藤は笑いながら僕を見た。
「よく言うぜ。関本抜きじゃ飯も食えないみたいにおまえが言うからだろう」
「一之瀬は、関本に二人で行くって言えないんだろうな」
そうだよ、と僕は内心毒づいていた。
「そう言うおまえだって、俺と行くって言わなかったんだろう？」
「先約があるとは言ったが、誰とまでは聞かれなかった。別に嘘はついてない」
涼しい顔で工藤が笑う。
そうか、こいつは元々そう言う奴だった。いつだって、焦ったり慌てたりすることなんてない男だ。
「ずるいぞ、おまえ」
僕は子供みたいに不貞腐れた。

5

僕は工藤に恐らく一駅以上はある距離を歩かされ、待ち合わせの公園よりは随分と大きな公園の傍の、お洒落なイタリアンの店へと連れて行かれた。普段なら会社近くの縄暖簾の居酒屋か、ちょっと小汚いぐらいの中華屋だったりするのに、およそ男同士で入るには無用に洗練され過ぎた店構えで、慣れない僕は緊張気味だった。

用意がいいと言うか、こう言う店なら当然なのか、工藤は前もって予約を入れていたらしく、名前を告げると、にこやかな笑みと共に奥のテーブルへと案内された。

「何、飲む？　ワインもあるけど」

メニューを広げて僕に勧める工藤を尻目に、よく見もせず一言で片づけた。

「取り敢えず、ビール」

会社帰りのサラリーマンなら、取敢えずビールは基本だ。僕は聞くまでも無いと言う顔で言い放った。

そんな僕に呆れるような笑みを零し、工藤は僕のビールと、なにやら自分の為に別のものをオーダー。

暫くすると僕の前には、いつもの居酒屋なんかのドッシリとしたジョッキではなく、綺麗な曲線を描いたグラスが音もせずに静かに置かれた。それは同じビールとは思えないほど、よそ行きの顔をしていた。

工藤の前には、泡は泡でもグラスの中を優雅に立ち上る、繊細で細長い首をしたシャンパングラスだ。

こいつ、こんなにお洒落なモノを飲むんだ、と改めて目の前に座る男をまじまじと見つめた。

「ここ、トリッパがお勧め。それと海老が名物だよ」

慣れた仕草でメニューを指差すところをみると、どうやら初めて入った店ではないらしい。

「トリッパ？」
そんなお洒落なものは聞いたことも、食べたこともない。
「内臓系だよ」
そっち系の物は、ことごとく苦手な僕は渋い顔をする。
「まあ、騙されたと思って食べてみろ」
「嫌だよ。大概騙されるから」
「子供だな」
工藤は笑って、呆れるような目で僕を見る。
オーダーは全て工藤に任せて、僕らは「お疲れ様」と、グラスを合わせた。
オヤジ臭く、「ぷは～」と言わないだけましだったが、僕は一日の労を労うように、ご褒美のビールを一気に半分ほど流し込んだ。サラリーマンになってこの一瞬が至福の時だ。
いつからだろうな、ビールが美味しいなんて思えるようになったのは。この苦みを美味しいと思えるようになったと言う事は、僕も立派な大人ってことだろう。
工藤はそんな僕を眺めながら、いかにも優雅な仕草でグラスに口を付けた。折れそうで繊細なグラスが、お洒落な工藤にはよく似合っている。
「いいとこ知ってるんだな、よく来るのか？」
僕は珍しいものでも見るように周りを見回す。
こげ茶色に統一されたインテリアはほっとするぐらい落ち着けるし、趣味の良い音楽は煩過ぎず、静か過ぎず、薄いピンク色のテーブルクロスは清潔でシミ一つない。
周りはカップルか、女の子同士のグループ。
上手に他の客が目に入らないように配された観葉植物が、ゲストだけの空間を巧みに演出していて、その心憎さに感心した。
「誰と来たのか白状しろ」
僕はニヤニヤと工藤を見る。
「ランチで入ったら安くて結構いけるし、夜もなかなか良かったか

らね」
そんな事は聞いていない。夜にこんな所に一人で来るものか、と僕は好奇心丸出しの顔をする。
「気になるか」
彼は優雅に笑って、眼の高さに上げたグラス越しに撲を見る。そんな気障っぽい仕草も不思議と似合うから、男前はズルイ。
「そりゃあな。おまえあんまり言わないから」
僕も男だから女性と二人で食事ぐらいはしたことがある。だけど社会人になってから、特に彼女と呼べる存在はいないし、どこか仕事で手一杯だ。そんな暇がないと言ったらモテない男の言い訳だと言われるかもしれないが、その上まずい事に、最近ではそれ自体に何も不都合を感じないから、ますますもって縁遠くなってしまう。
こんな事でいいのか二十五歳。
もう一人の同期の関本だって、顔も頭も良いし仕事もできる。女性にはかなりモテると思うけど、あいつも特定の彼女が居るとは聞いていない。尤も水面下で、こっそりと付き合っているとも考えられるが、同じマンションに住んでいて、その気配を感じさせないと言う事は、現在進行形がいないと言うことじゃないだろうか。ただ、撲はその辺の勘は全く鋭くない。
眼の前の工藤はどうだろう。こいつも関本とは違ったタイプの男前だ。
関本が行動力のあるリーダータイプの男だとしたら、工藤は頭脳明晰な研究者タイプ。外見だって男性ファッション誌のモデル並みのスタイルをしているし、何事に措いてもセンスが良い。そんな奴がモテないわけないと思うが、工藤は自分の色恋を誰かに喋るタイプの男ではなかったし、他人に目撃されるなんてヘマもしない。
「取引先の子と一度ね」
今もそう言って、謎めいた笑みを浮かべている。
そう言えば、この男はあんまり声を上げて豪快に笑わない。改めて二人で向き合い、そんな事に今さらながら気がついた。

最初こそ緊張もしていたが、勧められるままにワインなんかに手を出し、僕は工藤相手に会社の愚痴や上司の悪口、果ては社内の噂話を喋り倒していた。

男の喋りはみっともない。それは重々承知している。

でも、仕方ないじゃないか、こいつほとんど喋らないんだから。

三人でいる時は、関本が僕らの会話を上手くリードしてくれる。工藤も口下手ではないはずなのに、今夜の同期は、やはりどこか何時もとは違う空気を漂わせていた。

僕の話に耳を傾け、適当なところで相槌を打ち、笑ってさえくれるのに、どこか上の空で片方の脳でなにかを考えている。

だから僕は余計にはしゃいでみせた。

なんだか不安で落ち着かないんだよ。

そんな事を思った時、工藤が意を決したかのように両肘をついて、少し身を乗り出した。

「一之瀬」

囁くように僕の名前を口にした。

彼はどちらかと言うとあまり大きな声で話しをしないが、不思議と耳に馴染むような話し方をする。

僕はと言うと、はしゃぎついでに騙されるつもりでトリッパを口に放り込んだところだった。

ぐにゃりとする触感に、少し情けない顔をしてみせた。

そんな僕にはお構いなしに、工藤は少しだけ躊躇ってから静かに言った。

「どうも一之瀬の事が好きみたいなんだ」

6

その時の僕は、彼の言葉の意味がよく分からなかった。
得体のしれないトリッパが、既に口の中で拒絶反応を起こしかけていたと言うのもある。吐き出すこともできないし、租借するのも気持ちが悪かった。
彼は今なんて言ったんだ？
確か好きとかなんとか……
好きってどう言う意味だよ。
ぐるぐる廻る思考に焦って、僕は取り敢えずトリッパと彼の言葉を一緒に呑み込んだ。
「大丈夫か？」
涙目の僕を気遣うように工藤が僕の顔を覗く。
大丈夫かって、トリッパの事か、それともおまえのその言葉の方か。
ワインを促がされたところをみると、僕のトリッパ初体験を心配しているようだ。やってはいけない事だと思うけど、僕は口の中を濯ぐような下品な飲み方でワインを流し込んだ。
「やっぱり気持ち悪いか？」
この場合、どっちとも取れる言い方だ。僕は少し苛立った。
「さっきから、どう言う意味だよ」
工藤は声を立てずに笑う。
「そうだよな。好きなんて言われたら困るか、やっぱり」
そっち――
軽い眩暈さえ覚えるが、これはワインのせいばかりでもなさそうだ。
そりゃあ、困るだろう。男に好きって言われても。
いや待て、待て……好きにも種類がある。早とちりの僕が、何か大きな勘違いをしている可能性だってある。ここで変に大騒ぎして、

後で恥をかくのもバツが悪い。
もう一度確認してみよう。
「好きって、友達としってことだろ」
当然そうだろうと確認するような意味で言ったわりには、僕は恐る恐る工藤を窺っていた。
好きな先輩とか、好きな先生とか、好きな食べ物とか、一般的な好みを表す好きなら別に男に言われても焦る必要はない。
きっとそう言う好きだよな。
ところが工藤は、少し困った顔をする。
そんな顔をされると、ますます僕は落ち着かない。
「俺の好きはそう言った好きとは違う気がする」
と、来た。
これは、まさかのカミングアウトなのか？
生まれてこの方、男に告白されるなんて経験はないから、どうしていいのか分からない。
「ちょっと待ってくれ」
取敢えず落ち着いてくれと言いたかったが、焦っているのは僕だけで、同期は全く冷静そのものだった。

こんな場合、器用な人間ならお酒も入っていることだし、酔っているのを良い事に、上手くはぐらかせたのかもしれない。それこそ頭の良い同期なら、不器用な奴がなんだか誤魔化そうとしているのは直ぐに見抜けるだろうし、そっと引き返す事ぐらい訳ない事だ。
ただその夜の僕は、日頃飲み慣れてないワインの所為もあり、いつになく気が大きくなっていた。最初こそ同期の告白に焦っていたものの、それなら彼の言う好きが何なのか、その正体を突き止めようなんて、今にして思えばかなり無謀な挑戦をしていたわけだ。これは怖いもの見たさなのか、好奇心なのか、闇雲に藪の中を突っついているようなものだった。
それに彼は掛け替えのない同期の一人であり、もしも彼が異性を

好きになるような感情で僕に告白したのだとしたら、それ相当の覚悟のいることだろうし、そんな想いを頭ごなしに拒否するほど、僕は非道な人間でもない。少なくとも、彼がそう思うに至った経緯ぐらいは、聞いてあげられる懐の深さはあるつもりだ。

「友達の好きじゃないなら何なんだ？」

工藤は煙草を取り出す。ゆっくりとした動作で指に挟むが火を点ける素振りはない。

彼は彼で、思わず口走った自分の『好き』の正体を推し量っているのだと思った。

「一之瀬と関本が仲良くするのをどこか快く思わない自分がいるんだ。嫉妬だろうな。そう言うのって友達の好きにはないだろう？」

同期にしては珍しく、その言葉に迷いがある。

答えになっているのか分からないけれど、僕は撲で、できるだけ彼の好きを修正しようと試みていた。

「友達同士でも嫉妬や独占欲はあるだろう。そんなに特別な感情と思わなくてもいいんじゃないのか」

この時の僕は好きと言う言葉の正体を突き止める事に夢中で、それが自分自身に向けられている感情だと言う実感が、酔いと共に薄れていた。

工藤は考える。

煙草は相変わらず指に挟んだままだ。

僕は何故だかその指先ばかりを見つめていた。

「俺はね、一之瀬に触れてみたいんだ」

その一言で僕の心臓は飛び上がった。突っついた藪から蛇が出た。

彼の好きの正体が、いきなり現実味を帯びて僕に迫って来る。

同性愛、ホモ、ゲイ。

どれも自分で口にするのは憚られる言葉が頭の中を駆け巡った。

「工藤、おまえってそうなのか？」

僕はこの曖昧で微妙な言い回しで、その言葉を逃げ切った。

ここに来て、どうやら僕は要らぬところを突き詰めてしまったよ

うだと、この時になって自分の失態に気が付いた。そんな僕の動揺に、工藤が笑う。
「別に男が好きなわけじゃない。これまで、一度だってそんな事はなかった。一之瀬だから好きなんだ。分かるか？」
いや、分からん。
男を好きなわけじゃないと言われて、「そうか、それなら良かった」と、安心できる状況でもなさそうだ。男を好きな性癖でもない同期が、男の僕を好きだと言う感情が、今一つ分からない。少し行き過ぎた友情なのか、それとも同期は僕に対してだけ同性愛的な感情に目覚めたとでも言うのだろうか。果たしてそんな限定付きの同性愛が存在するのか？
「おまえさ、いつからそんな風に考えていたわけ」
僕は三年間の彼との付き合いを振り返りながら、そう聞いてみた。
確かに撲は色恋に関して言えば鈍い方かもしれない。でも、これまでの付き合いで、彼が必要以上に撲を見つめたり、それとなく撲に触れたりする事はなかったと思う。普通、なんとなくだけど、相手が好意をもっているのは分かるものだ。この場合、相手が同性であったから、僕はそのサインを見逃していたのか？
工藤だってもともと同性愛者でもないのに、どうして男の僕を好きだなんて思いはじめたんだろう。僕の中に、彼にそんな衝動を起こさせるような何かが存在でもするのか？
考え出したら分からない事だらけだ。
それにしてもこれは彼らしくないやり方だ。仮に彼が異性に感じるような感情を僕に持ち合わせていたとして、いきなり僕に告白までするだろうか？
この告白は相当に勇気がいる。はっきり拒絶されるとか、悪くしたら絶交されるとか、もしかしたら誰かに吹聴されるかもしれないとか、そう言ったリスクだって伴う。
頭の良い彼がそれを考えないわけがない。それとも、彼には僕なら告白しても大丈夫だと思えるような、勝算があるのだろうか？

焦る僕とは対照的に、同期は少しも動じない様子で僕を見ている。
身の置き場のないような状態に、僕は取敢えず落ち着こうと煙草を取り出した。口に銜えてライターを捜すが、動揺からか直には見つからない。鞄やジャケットのポケットを必死で探る。
そんな僕に工藤の手が伸びた。今の僕は、それだけでも十分脅威だった。
ヒヤリと凍りついたまま動けなくなる。
何のことはない、口に銜えた煙草の前にカチリとライターの火が灯っただけだ。僕はおっかなびっくりで、差し出されたライターに顔を近づけ、火をもらう。そんな僕を、工藤は黙って見つめていた。
指先がどうしても震えてしまう。
僕の２５年の人生で、男に告白されるなんて初めてなんだ。これくらいの動揺は当然じゃないか。
工藤もやっと思い出したように、自分の煙草に火を点けた。
「いつからだろうな」
立ち上る煙草の煙を目で追いつつ工藤は囁く。
関本の際立つような通る声とは違って、工藤はそっと囁くように話す。
いつかの飲み会の席で、工藤の声がセクシーだと女子社員が騒いでいたのを思い出す。耳元で囁かれたらグラッと来る声だそうだ。
男の僕はグラッとは来ないが、状況が状況なだけに、どうしても口説かれているのではないかと錯覚する。いや、実際口説かれているわけだろうな、これは。
「もともと男が好きじゃないなら、いきなり男の俺を好きになったりはしないだろう。俺、おまえになんかしたのか。どうしたらそんな風に思えるんだ」
焦っていた撲は、かなり感じの悪い言い方で彼を突き放そうとしていた。今や全力でこの場から逃げ出したい。
工藤は別に気にした風でもなく、相変わらず薄っすらと笑いながら、思い出話でもするような遠い眼をして話し出した。

「一之瀬が関本って口にする度、なんだろうな……自分でもどうしようもなく心がザラつくんだ。俺はどうやら一之瀬を独占したいらしい。今日おまえを誘った時、関本って言うのに、自分でも驚くぐらいに嫉妬したんだ」
あの時の違和感がここで繋がった。関本の名を口にした僕に、怒ったような素振りを見せた事情がやっと呑み込めた。
なるほどね。
そうは理解できても、これは落ち着いてはいられない状況だ。
凡そ嫉妬と言う言葉が似合いそうもないこの男が、ドロドロと僕への気持を吐き出す。僕は僕で、出来るだけ冷静さを装い、ここに至ってもまだどうやって工藤を説得しようかと、気持ちは後ずさりしながら考えていた。
「俺達、三人同期じゃないか。俺と関本が嫉妬するような関係じゃない事ぐらい、おまえだって分かるだろう？」
取敢えず、嫉妬される理由なんてないことを僕は必至に訴えていた。
「好きになるって理屈じゃない。そんなに聞き分けの良い感情なら俺だって悩まないさ」
ここまで言われたら、工藤の好きが、もはや友情の範囲を超える好きであるとしか認めざる得ない。ただ、認める事はできても、それを受け入れるのは別の次元の話だ。
僕はここで、なんとしても工藤を説得しなければならない。
果たして僕にそんな芸当ができるのか？
ほとんど吸わないままの煙草から立ち上る煙を、じっと眼で追いながら僕は考える。
何も整理できないまま、それでも僕は手探りで喋りだす。
「好きか嫌いかの二者択一なら、好きなんだと思う」
心なしか工藤が嬉しそうな顔をするから僕は慌てて先を急ぐ。
「だけど俺の好きはおまえが期待するような種類の好きとは違う。俺にとってはおまえも関本も同じように大切な存在で……どちらが

好きだとか、友情以上の感情とか……そんなことは考えられないし、今の関係を崩したいとは思わない。もちろんどちらが好きとかも考えられない。もし、おまえが今の状況にどこかに疎外感を感じると言うのなら、出来る限りそれを埋めるような努力はする。今の俺には、これ以上の約束はできないし、おまえの期待には応えられないと思う」

少ない経験の上に、『男に告白される』なんて項目はないから、これで良いのか悪いのか全く分からない。今言えることはこれが全てで、これ以上は僕には考えられなかった。

意気地なしの僕はまともに同期の顔を見ることができず、手元の煙草を玩びながら相手の反応を静かに待つ。

「一之瀬」

こんな時に僕の名前を呼ぶのはずるい。

しかたなく僕が顔をあげると、薄っすらと笑みを浮かべた工藤が僕を見ている。特に悲観したふうでもなく、反対に気遣うような素振りさえある。

「一之瀬を困らせるつもりはないんだ」

もう十分困っている。

そうとも言えない僕は煙草を口に運ぶ。

「一之瀬をどうこうしたいってわけじゃないんだ。でも、今までとは違うものが俺の中にあって……やっぱり、そういうのは困るか」

店内は適度に灯りが落ちていて、テーブルの上にはキャンドルグラスが揺らめいている。それでなくとも、舞台効果は満点で、こんな話は大きな声ではできないから、声を潜めるように話す。少し身を乗り出し、気遣うように覗き込む視線が僕をますます落ち着かなくさせた。

僕が女だったら、工藤ほどの男にこんな風に告白されたら、すんなり頷いているじゃないだろうか。

「だから、こういうのは……」

それ以上、次に続く言葉が見出せない。彼を傷付けたくないと思

いつつ、僕をこんな状況に追い込んでいる事に少なからず苛立ちを感じるから、ここで何か口を開いたら取り返しのつかない言葉を発しそうで、僕は何も言えなくなっていた。
僕らの前に沈黙の川が横たわる。
すっかり冷めきった料理が、精巧にできた蝋細工のように見えてくる。
トマトベースのあの妙な食べ物。
なんだっけ……そう、トリッパだ。二度と食わない！
僕は考えることと会話を続けることをすっかり放棄して、目の前の料理をじっと見つめるしかなかった。
気まずい沈黙を破ったのは工藤だった。
「弱ったな……一之瀬にそんな顔をさせるつもりで言ったんじゃないんだ」
工藤は困ったなと言うように、頬杖を突く。ちょっと考えるように視線を逸らしてから、灰皿の煙草を押し潰す。ずるい僕は、そんな工藤の次の言葉を静かに待つ。
微かにため息が聞こえた。
「ごめん、今日のは聞かなかった事にしてくれるか」
多分この状況で工藤に何が言えただろう。それでも僕はそんな工藤に腹を立てていた。
こんな爆弾発言を今更聞かなかったことにできるか？
僕はそんな器用な男ではないし、明日から平気で顔を合わせる自信もない。
そんなに簡単に取り消せるなら、告白する前にもっとよく考えろよ。
どうしてくれるんだ。
僕は明日からどんな顔しておまえと付き合えばいいんだよ。
それにおまえはこれで満足なのか？
明日から何もなかったように、普通に友達として接することができるのか？

そんなに簡単なものなのか？
何故だか言いたいことが沸々と沸き上がってきたが、これ以上深入りするのは危険だと僕の頭の中で半鐘が鳴っていた。僕は全てをそのまま呑み込む。途轍もなく大きな塊が、ゆっくりと咽喉を落ちて、途中で痞えるような嫌な感覚だけが残った。
工藤は実に彼らしいと言うか、何事も無かったような引き際をみせた。
「帰るか」
同期は残ったグラスのワインを飲み干す。僕もそれに倣うが、胸の痞えは降りなかった。
冷めた料理はこれ以上咽喉を通りそうにない。
「そうだな」
僕らは中途半端に食べ残したまま、席を立つ。
誘ったから俺が払うと言う同期に無理やり半分押付けて、僕は先に一人で店の外に出た。
ガラス扉の外で同期が勘定を済ませているのを待ちながら、改めてこの店を振り返った。
心地よい店だが、僕は誰かを誘ってここにもう一度足を運ぶ気にはなれない。彼の告白ごと記憶から抹殺してしまいたい場所だ。
今更だけど、あの時の同期のきっかけの言葉まで、時間をリセットできないだろうか？
僕らの関係が元に戻れるのなら、どんな事だって僕はやってみせただろう。何が何でも関本を誘って、いつもの三人で、考えもなしに笑って飲んで騒いでいただろう。
取り戻せない時間を儚んで、僕は大きなため息を吐く。
凍りついた冬の空に、吐く息が白く靄になる。思わず身震いしてしまったのは、何も寒さだけではないような気がして、慌ててコートの襟をかき寄せた。
同期が出てくるのを確かめてから、僕は丁度路地を入ってきたタ

クシーに手を上げた。
今日はこのまま暗い夜道を二人で歩く気にはなれなかった。
「タクシーで帰る」
開いたドアに、まるで逃げるように滑り込む。
ここから一刻も早く立ち去りたい。
僕を好きだと言った同期を気持ち悪いとか嫌だとかは思わなかった。ただ、落ち着かない状態のまま二人でいる事に気詰まりを感じるから、せめて今だけは一人になりたかった。
「気をつけて帰れよ」
僕に向けられる気遣いに何故だか苛立ちを感じながら、運転手に行き先を告げる。いつもなら途中まで一緒に乗り合わせるはずなのに、今日はどちらからもその言葉は出ない。　彼だって僕と狭い空間を共有するのは気まずいはずだ。
工藤は閉まる扉の横に、僕を見送るように立っていた。
顔を上げて『おやすみ』の一言ぐらい言うべきなのは分かっていた。でも、僕にはそんな余裕すらない。
僕に断られた工藤がどんな顔で僕を見ているのか。
そこに傷ついた様子を少しでも見てしまったら、僕は明日からまともに彼と顔を合わせることができないだろう。
タクシーは僕と工藤をゆっくり引き剥がすように発進をする。路地を抜けて角を曲がる時になって、やっと工藤を振り返えることができた。車中の人となった僕を見つめる仮想の視線を想像していたが、彼は僕など見てはいなかった。
まるでスポットライトのように、彼に外灯が当たっていた。
少し俯き加減に地面の一点を見詰める同期の姿。
その表情が見える距離でもないのに、僕は彼が今どんな顔をしているのかさえ想像ができた。
後悔と失望。
リセットしたいのは、寧ろ同期の方かもしれない。
情けない自分の醜態に、僕は深い溜息と共にタクシーの後部座席

に身を沈めた。

7

同期の告白から一夜が明けた。今日が土曜日で、彼と顔を合わせなくて済むと言うことが僕には救いだった。何も男に告白されたからと言って、いきなり世界が変わってしまうわけでもないだろうが、僕にとってはそれこそ天と地がひっくり返ったようなものだ。どこか落ち着かないし、心がざわついて昨日はあんまり眠れなかった。

同じ告白でも、これが女性からなら僕はあんなに動揺はしない。例えそんなに好きでもない女の子に告白されたとしても、困りはするが震えるほど緊張するなんてなかっただろう。そう言う意味で言えば、男に告白されると言う事はとても尋常ではない体験だったに違いない。

なんとなく携帯が気になり着信を見たら、深夜に工藤からメールが一件届いていた。

これほど憂鬱なメールはない。

タイトルもないメールを開くにはどうしたって躊躇するが、そのまま削除するわけにもいかず、僕は恐る恐る開いてみた。

『今日は付き合わせて悪かった。二課の会議資料は月曜にでもメールする』

なんだ――

なんとも素っ気ない内容に肩すかしを食らった気分だ。何かを期待していた訳でもないが、メール一つだけでも動揺する自分が可笑しかった。

そう言えば、火曜の会議資料。結局未完成のまま帰社してしまったわけで、久しぶりに休日出勤をしてみようかと思い立つ。恐らく一、二時間で片付くだろうし、休日の方が余計な邪魔が入らず仕事は捗る。このまま家にいてもぐずぐず考えるだけだし、いっそ気晴らしに仕事でもして、その後どこかで優雅にランチでもどうだろう。

僕はその思いつきに心を弾ませた。

休日なので僕は私服でマンションを飛び出す。
一階の守衛室に声を掛けると、既に僕のフロアは先客があるとの事。休日出勤は珍しい事でもなく、実際休日に稼動している部署もあったりするので、僕は深く考えずエレベーターに飛び乗った。
僕の営業部は5階のフロア。
一人しか乗ってないエレベーターの箱は、途中に止まることなく一気に僕を引き上げる。階数表示のランプを見上げていた僕は、開いたドアに吸い寄せられるように足を踏み出していた。
でも、しかし――こんな事ってあるのか！
いきなりエントランスホールに立っている工藤と出くわした。

驚いたってもんじゃない。昨日の今日だし、告白された次の日にまさかのタイミング。自分の運の悪さを呪ったのは言うまでもない。
情けないけど驚くほど動揺して、思わず身体が硬直したように立ち竦んでしまった。
ある程度彼と顔を合わせる事を踏まえての心の準備も整っている月曜日だったら、僕ももう少し落ち着いた笑顔の一つでも捻り出していたのかもしれない。あまりにも突然のことで、適当な言葉さえ浮かばす、撲は当然のごとく慌てふためいた。血流が逆流して、真っ赤な顔になったのが自分でも分かった。
「一之瀬も休日出勤か」
工藤の方は僕の動揺を知ってか知らずか、実に涼しい顔でいつもと変わらない様子。
「会議の資料あとちょっとだから……いや、直ぐ帰るんだけどな」
当然会話もぎこちなく逃げ腰の僕。正直、『回れ右』して帰りたいとさえ思った。
「飲むか？」
工藤は手にした紙コップのコーヒーをちょいと上げる。エレベーターホールに自販機が並んでいて、工藤は丁度それを買ってデスク

に戻るところだったようだ。
「朝飲んできた」
「そうか」
ぎこちないままその珈琲の香りに引き摺られるようにして歩きだす。
工藤の服装も休日仕様で、そう言えばそんな彼を見るのも久しぶりだ。
モデルのようにスタイルが良いと、普通のジーンズさえどこかのデザイナーズものじゃないかと思える。彼の場合は実際そうだったりするから、迂闊に知ったかぶりもできない。
軽く腕まくりした手首にパシャの時計がチラリ。あれは僕も分かるけど、手が出せない代物だ。昔から工藤はさり気なく良いものを身につけている。大して変わらない給料で、どこでこの差が出るのか謎だ。僕の場合はほとんどが飲んで食って、お腹の中に入れて消えてなくなるんだろうな。
「じゃあな」
僕がお互いの懐事情をぼんやりと考えている間に、工藤は手前のドアから中へ入る。
僕はもごもごと返事をして、もうひとつ先のドアへ向かう。同じフロアだが、工藤の席は僕の出入りしているドアとは違って手前のドアが近い。
机に向かうと、当然視界の隅に工藤の姿が映る。生憎今日の休日出勤は二人だけだし、どうしても彼の存在を意識する。僕を好きだと言う男と二人きりだと思うだけで、なんだか落ち着かない。パソコンに向かい仕事をしているようでも、常に心の半分を無言の同期の存在感に脅かされていて、なかなか集中ができない。
無理にでも意識を仕事へと向かわせているうちに、何時の間にか時間を忘れる位に作業へ没頭していた。夢中になると周りが見えなくなるのは昔からだ。
首の凝りを解して伸びをする。ちらりと視界の隅で、工藤がやは

りノートパソコンを閉じるところだった。
あいつ、見てたんじゃないのかと、変な勘ぐりもしたくなる。
「終わったか」
遠くから彼が声を掛けてきた。
「ああ」
僕もパソコンの電源を落として閉じる。
工藤はコートを掴んで僕の傍まで来ると、車のキーをチャラリと鳴らしてみせた。
「送るよ」
本当は遠慮したかった。昨日の今日で車は密室だし、僕はかなり妄想大魔王になっていた。
それが顔に出ていたのだろう。工藤は唇をスッと上げて笑う。
「襲ったりしないから安心しろ」
なんとも物騒な事を言って僕をびびらせた。

8

工藤の車はシルバーのＢＭＷ。サラリーマン三年目でこんな車を乗り回しているのは、僕とは違ってもともと恵まれた環境に育った人間に違いない。

僕は未だに自分の車は持っていないし、その必要性もあまり感じない。通勤は電車で充分だし、買物だって徒歩圏内にあるスーパーで事足りる。滅多に乗らない車の為に維持費を掛けるのも勿体ないし、第一、車だと飲めないじゃないか。お酒好きの僕にはそれが一番辛い。

そう言えば、女性は運転する男性の何気ない仕草にドキリとするらしい。例えば車をバックで入れる時にさり気なく助手席側に手を乗せて、振り返りながらハンドルを切る仕草が色っぽいとか。

果たして彼もそうだったりするんだろうか？

工藤ほどの男なら、さぞかし女性はキュンとするんだろう。そんなバカな想像をしてしまう僕は、昨日の告白でなんだか可笑しくなっていたのかもしれない。

「少しドライブでもするか」

断る理由は何も思い当らなかった。今日は休みで明日も休み。

僕は素直に頷いていた。それにこんな時でなければ、こんな高級車にはなかなか乗れない。僕も男だから、単純に将来こんな車に乗ってみたいと思ったりした。

「たまに走ったりするのか」

工藤はチラリと僕を見て、唇だけ上げて笑ってみせる。

「そうだな、煮詰まってくるとドライブするのが一番かな。いろんな事考えて、独り言呟いて、家に戻ったら結構スッキリとする」

「へえ、おまえでも煮詰まる事あるんだ」

「意外だったか？　今朝は思いっきりそんな気分だったよ」

それは俺のせいか。

喉元まで出掛かった言葉を呑み込む。同期に特に変わった様子はないが、彼は彼なりに昨日の告白について、考えることがあったんだろう。
僕だったら告白してフラれた翌日に、とてもこんな風には話が出来ない。
「昨日、眠れたか？」
それなのに、まるで僕を気遣うようにそんな台詞を口にした。
「速攻寝たよ」
流石に本当の事は言えない。
「そうか」
同期は微かに笑う。
「おまえは？」
僕は彼の横顔をこっそりと盗み見る。
彼は何を考えているのか暫く黙っている。
「言ってもいいか」
そんな前置きをされると、僕は少しだけ警戒をする。昨日の今日で、工藤が何を言い出すのか十分想像できるからだ。ここが車内で、他人に聞かれる恐れがないのが幸い。
「聞かなかったことにするんじゃなかったのか」
僕なりに最新の注意を払ってそう言った。
「そうだったな」
工藤はそのまま黙り込む。そうなると、車内はなんだか居た堪れない空気に支配される。もともと我慢強くない性格の僕は、自分から墓穴を掘る。
「俺が考え方を変えるとか期待するなよ」
「俺は一之瀬をどうしたいんだろうな」
工藤は自嘲気味に笑う。
そんな事を笑いながら言われても、僕はどうしたらいいんだ？
「おまえ俺に触れたいって言ったよな。それって抱きたいって事なのか？」

自分で言ってその生々しさにドキリとした。ＳＥＸしたいのか、と言わなかっただけましだ。
彼は僕の一言で暫く考え込む。考えるってことはそうなのかと、撲は内心穏やかではない。
そのせいで狭い車内は沈黙に包まれ、僕は嫌な汗を掻く。なら、あんな事を言わなきゃいいのに、と今更ながら自分を責め続けた。
「おまえ相手にたつと思うか？」
工藤は平気でその台詞を口にすると、からかうようにニヤニヤと僕を見た。
だから、そう言う事を俺に聞くな！
僕がすっかり絶句してしまうと、工藤は少し真面目な顔をして前を見据えた。
「そう言うことがしたいわけじゃないんだ。ただ、友達と言うだけでは片づけられないものが今の俺にはあるらしい。おまえさ、友達としての好きじゃなければ何だと思う？」
いきなり抱く、抱かない、の話になるのはもちろん困るが、だからと言って僕にそんな質問をされても返答のしようがない。
そう思っているうちに彼はまた喋り出す。
「例えば、関本だって同期で友人だし、好きには違いないだろう。ただ、一之瀬に対するような感情とは明らかに違う。俺は一之瀬を独占したいと思うし、ただ友達というだけでは満足できないんだ。おまえにとっては迷惑な話だろうな」
男が好きなわけでもない僕が、迷惑じゃないって言ったら嘘だ。ただ、ここですっぱりとそう言って、彼を傷つけてしまうのが怖い。いや、そのことで自分が悪者になる潔さが僕にはないだけかもしれない。
だから僕は辛抱強く、彼に説得を試みた。
ここは密室だし、彼はハンドルを握っているし、どうしたって僕は慎重になる。
「好きって言う感情は僕だってなんとなく理解できる。おまえが本

来、男が好きってわけじゃないなら、それは独占欲みたいなものじゃないのか。ほら、思春期なんかにさ、そんな風に感じる事あるだろう。友達でも最上級に好きな奴。そいつが誰かと仲良くすると嫉妬するし、自分が一番じゃなきゃ嫌だって思うことあるだろう。おまえはさ、そう言う風に俺を見てるんじゃないのか。なにも、男が女を好きになるような、そんな対象として俺を見ているわけじゃないだろう」

工藤はチラリと僕を見る。そして又暫く黙ってしまう。

この沈黙はかなり重苦しくて、この状況を作り出している工藤が恨めしくなった。

車はいつの間にか高速に乗っていた。エンジンの回転する音で車が鞭を打ったかのように加速する。少しスピード出し過ぎじゃないかと思うのは、気のせいだろうか。

果たして彼は今何を考えているのだろうか。

僕の説得になるほどと思ってくれただろうか。

それともこのまま自棄を起こして、車ごとどこかに突っ込んだらなんて、物騒な思いつきが頭をかすめてはいないだろうか。

そうなったら、多分僕らは死ぬんだろうな。

きっと、痛いなんて思う間もないだろう。

僕は思いつめたように二人が奈落の底に突っ込んで行くような、マイナスのイメージばかりを思い描いていた。だから彼が突然、「お腹すいたな」と言う全く違った発想の言葉を吐いた時、僕はポカンと彼を見つめて、その後急に可笑しくなって笑い出した。

そう言えば、朝から何も食べてない。

「お腹空いてたら、碌な考えが浮かばない。どっかで飯でも食うか」

工藤も笑いだし、張りつめたような空気が一気に和らいだ。

僕らはその後、彼が一度だけ行って忘れられないと言う蕎麦屋を探し回り、遅い昼食にありついた。

僕はなんとなく、それ以上彼の好きの正体を突き止めようとする事もなく、最近どんな本を読んだとか、どんな音楽を聞くだとか、

他愛もない話で盛り上がった。
　考えたら入社して三年、僕と彼の間に二人きりで過ごすこんな時間はなかったと思う。彼が僕を好きだなんて言わなければ、これから先だってもっと深い絆の友情を築く事ができたはずではないだろうか。彼はどうして、僕に嫌われるかもしれないと言うリスクを犯してまで、告白なんてしたのだろうか。彼くらい頭の良い人間が、そこに気がつかないわけがない。
　たとえば関本ではなく彼が僕と同じ課に配属になっていたら、きっと彼は関本に嫉妬する事なんてなく、僕に告白をする事もなかったのではないかと思ったりする。頼りない僕が頼りにするのは一番身近な工藤で、そんなポジションに彼はそれだけで満足したのかもしれない。そのちょっとした運命の掛け違いで、僕らは今振り回されているのではないだろうか。

9

元来た道を辿って、僕のマンションに辿りついたのは夕方ぐらい。昼間の興奮が冷めると、多少疲れもあったのか、僕らはすっかり無口になっていた。運転を任せていた僕としては、そのまま帰ってもらうのは申し訳ないと言う思いで、「珈琲でも飲んで行くか？」と、気軽に彼を誘っていた。

これが男と女の場合、家に誘うと言う事はどこかに暗黙の了解がある。単純な男の発想かもしれないが、この時誘った僕に彼がなんだか戸惑いを見せるから、どうしたんだろうと考えて、その発想に辿り着いた。

まさかとは思うが、彼は僕に触れたいと言っていた男だ。

その言葉の重さに、僕は今になってうろたえる。

「少しだけ」

そのまま走って逃げようかと思っている間に、工藤は既に決断していた。僕は今さらながらに自分で掘った穴に落ちるような、情けない男と成り果てていた。

「久しぶりだよな、家に来るの」

出来るだけ平静を装ってエレベーターを待つ。実はこの時からジワジワと緊張が始まっていた。階数を表示する数字がゆっくりと1階へ降りてくる。気の利いた台詞も言えず、見上げる状態がなんとも気まずい。乗ったら乗ったで、窓もない小さな箱の中では閉所恐怖症にでもなったかと思うぐらい息が詰まりそうだった。それに僕に触れたいなんて言う男と二人きりだと思うと、どうしても平静ではいられない。

こんな精神状態で、彼を僕の部屋に入れても大丈夫なんだろうか。

僕の背中は真後ろに立つ工藤の存在にピリピリとする。エレベーターの中にはカメラもあるし、彼が僕に何かするとは思わないが、すっかり神経質になっていた。

４階のライトが消えると、僕は何時ものクセで『開』のボタンを押して、中に乗っている人間を先に降ろす。サラリーマン生活で身に着いたマナー。狭い箱の中、彼が僕の脇をすり抜ける。おしゃれな工藤らしく、透明感のあるフレグランスの香りが僕の鼻を擽る。それだけでも、妙にドキドキするものだ。

僕の部屋はエレベーターを降りて突き当たりの角部屋。何度か訪れた事のある工藤は、僕を待つ事もなく先を歩く。

ため息ひとつ。

なんだか項垂れたまま後をついて行く。

突然、工藤が足を止めた。それこそ警戒心全開の僕は、ぶつかりそうになって必要以上に驚いた反応をした。

「な、なんだよ」

ビックリ箱でも開けたような驚き方だった。

そんな僕にちらりと先を促す。僕の部屋の前で携帯電話を耳に当てて佇む人影があった。

同時にポケットの中で僕の携帯電話が暴れ出す。それを取りだす前に、人影の方から先に僕らに気付いた。

「なんだ、おまえら」

明るく屈託のない声が聞こえて、携帯電話が鳴り止む。念の為に取りだしたディスプレイには『関本』の名前を確認。僕は何だかホッとしてそれをポケットに滑り込ませた。

「休日出勤したら一之瀬もいて、ここまで送ってきた」

工藤はいつもの感じで関本に歩み寄る。

「工藤もいるなら丁度いい。実家から美味しい肉送って来たから一緒にどうだ？」

手にぶら提げている箱を掲げる。

「神戸牛か」と工藤。

「美味いぞ」

関本がニコリと笑った。

結局、僕らは三人で鍋を囲む事になり、関本と工藤は車で買出し

に出掛けた。僕は部屋に戻って仕舞っている鍋を取り出し、結婚式の引き出物に貰った小鉢を洗ったりして、今晩の宴会の準備をする。

鍋なら当然飲むことになる。

工藤は車で来ているし、どうするんだよ、帰りは。

明日も休みだし、泊まるんだろうな、やっぱり。

それってかなりやばくないか？

飲んだら乗るな。飲むなら乗るな。

交通標語が僕の頭の中をグルグル回る。

10

小一時間もすると、二人は両手一杯の荷物を抱えて帰ってきた。
何人分だと聞きたくなるぐらいの買い出し量だ。
「スーパーで追加の肉買って来た。食べ比べてみようぜ」
パックに入った肉が積まれる。もちろんビールは欠かせない。買い置きもあったので、さっき冷蔵庫に放り込んだ。
白菜、葱、椎茸、春菊、糸コンニャク、焼き豆腐、卵。
どうやらすき焼って事らしい。
「なんだ、これ？」
「ふ」
「ふ？」
「おまえ、すき焼に『ふ』は欠かせないだろう」
当然のように関本が言い放つ。
「関本がこれは絶対に必需品だって譲らないんだ。一之瀬、『ふ』なんか入れるか？」
工藤はなんだか納得いかないように『ふ』の入った袋で撲を指す。
「お味噌汁とかに入ってたっけ。そういや『ふ』ってあんまり食べた事ないな」
「だろ？」
ここで僕らは、『肉まん』と呼ぶか『豚まん』と呼ぶか、醤油党かソース党か、そんな他愛無い話で盛り上がる。
狭い台所に男が三人も立てないので、僕と工藤はほとんど関本にお任せ状態。
僕は遥か昔に自炊をすっかり諦めているので、社会人になった時に取り敢えず揃えた包丁も箱に入ったまま、新品同様な状態で何処かの引き出しに収まってある。
僕の独り暮らしなんて、キッチン挟み一つあれば事足りる。
インスタントラーメンの袋を切るから始まり、葱だってそれで刻

んだりする。
関本は引き出しや扉を勝手に開けて、包丁やらまな板やらを探し出し、手際よく準備を始めた。まあ、言ってみても鍋だから料理するって程でもなく、切ればなんとかなる。
工藤は灰皿片手に煙草を銜えながら、少し後ろからそれを眺めていた。
「おまえ、嫁にいけるぞ」
そう言う工藤に、関本は振り返って笑う。
「惚れるなよ」
そんな軽口を言いあう二人を眺めて、僕は少しだけホッとする。
関本に嫉妬すると言った工藤。
二人の間がこれまでと違ったものになる事を何よりも僕は望まない。
昨日の告白のせいで、工藤が関本を反目するようになったら悲しい。このままの状態で、僕に対する好きが、少しだけ行過ぎた独占欲だったと思い直してくれるのが、たぶん一番好いことだと思う。

さて、準備も整い、僕らは宴会へと突入した。
六畳のフローリングに長方形のテーブル。壁に背が凭れる体制が一番楽なんだろう。二人は並んでその特等席を確保する。
ずるいぞ、おまえら。
仕方なく僕は反対側に一人で座る。
見るとも無しに着けているテレビは僕の背中。
正面にこの二人を視界にいれる事に少しだけ抵抗を感じた。やはり僕はどこかで工藤と関本を意識しているからかもしれない。
缶ビールで乾杯をして、鍋が出来るまでにと買って来たお惣菜をつまむ。
関本は関西人なので、ワリシタを使わず、醤油と砂糖とお酒で鍋を作る。僕はいそいそと卵なんかを割ったりしながら、食べる準備に入る。

そう言えば関本って関西弁があまりでない。大学４年間ですっかりバイリンガルになったとほざいていた。
工藤は本当の意味でのバイリンガル。帰国子女で英語には全く困らない。
将来、海外勤務も夢でない男だ。
そう言う僕は極平凡な男。関西弁も英語も話せない。
こんな僕の何処が良いのか分からない。
「まずは行くぞ、スーパーの肉」
と、言いながら僕の小鉢に関本が肉を取り分ける。そう言えば、いつもこんな風に世話を焼かれるが、これが案外工藤をやきもきさせる原因じゃないだろうか。
お願いだから今日は自分の好きにさせてくれ。
こんな状況を工藤がどう思っているのか。
そこが気になる僕は工藤の顔がまともに見られない。取敢えず、小鉢の肉にがっつく。
独身サラリーマンにはスーパーの肉でも、十分な贅沢品だった。
「いくぞ！神戸牛」
やっぱり美味い。僕らは大絶賛。
関本拘りの『ふ』がまた絶品だった。肉の旨みが滲みこんで、とろとろとして、火傷しそうになりながら僕らは其れを食べた。
三人の話題はもっぱら仕事の話になる。サラリーマンなんだな、僕らは。
今期も残り少ない。営業マンの僕らは予算をクリアできるのか、今の所それが大命題。
明日は休みだと思うとビールもすすむ。当然、僕は酔っ払う。
「工藤、知ってるか？　一之瀬のやつ」
関本が突然思い出しように肘で工藤を突付きながら、そんな事を言い出した。
「なんの話だよ」
僕は全く警戒心なしで、片肘ついたとろんとした眼でビールを飲

みながら関本を見る。
「おまえさ、昨日はデートなんだろう」
飲んでいたビールを噴出す。
「隠し事できないな奴だな」
関本のニヤニヤした顔と、涼しい顔で煙草を吸う工藤を交互に見比べた。
「そうだったのか？」
なんて言いながら、工藤は惚けた顔で煙草をふかす。
「ばっ……なわけないだろう」
テーブルの上の粗相をティッシュで拭きながら僕は焦る。
「白状しろ、一之瀬」
関本も煙草を銜える。工藤が火を差し出すと、ちょっと俯きながら煙草に火をつけて、チラリと追い詰めるように僕を見据えた。
なんなんだ、二人して。工藤、おまえ何とか言えよ。
いやいや、やっぱり言わなくていい。
僕はこの展開にやたら焦り捲くる。
「一之瀬に彼女がいたっておかしかないだろう」
工藤が唇を上げて意地悪く笑う。
おまえもそう思うのなら、諦めろ。
大した効果はないだろうが、僕は工藤を睨みつける。
「俺はね、こいつに彼女ができるのが面白くないんだよ」
この発言に僕は驚く。こう言ったのが工藤だったら昨日で充分な下地があっただけに、僕はまだ納得できた。　いや、やっぱり納得はできないけど。
この台詞を口にしたのが関本だったのが意外だった。
「なんだよ、それ」
工藤も関本をチラリと見る。真横の関本には見えないが、ちょっと怖いぐらいの視線に僕はハラハラとする。
「一之瀬はさ、ずっとこのままで居て欲しいんだよな。ん……これって変か？」

関本は銜え煙草で工藤を見る。
「よく分からないな」
工藤は少し難い表情をした。
「こいつ不思議と庇護欲擽るだろう。俺はね、どっかの女に取られるのが嫌なんだよ」
おいおい関本、おまえもか。
「大事な娘を嫁にでも出す心境か？」
工藤が顔を背けるようにして煙草の煙を吐く。
「ま、そんなもんかな」
関本は咥え煙草で器用に笑ってみせた。
「何、勝手な事言ってんだ」
「嗜虐心を擽るって言われるよかマシだろ」
関本はケラケラと笑ってビールを飲む。
たぶん飲みすぎだ、こいつ。
「可愛いんだよな、おまえ」
関本は立ち上がると、僕の前髪をクシャクシャにしてから『トイレ』と宣言して姿を消す。

なんだろう、僕はそんなに男に好かれるタイプなのか。
僕の２５年の歴史で、同性に告白されるなんて事は一度もなかったし、「一之瀬、男に好かれるだろう」なんて指摘も受けた事はない。
むろん昨日までは。
こんなに男にモテモテで良いものだろうか。
誰にでも人生のうちで、最高にモテ期と言うのがあると聞いた。
まさか、これじゃないよな。
そんな事にただ一度のチャンスを今使っているとしたら悲しい。
それも男相手に。
「俺の妬きもちも、まんざら的外れでもないってことか」
工藤が自嘲するように笑うから、僕は居たたまれなくなる。

自分で言うのも変だが、関本の場合はどちらかと言うと保護者的感覚じゃないかと思う。それでも、あの発言はメガトン級の爆弾のような威力があった。
その張本人が涼しい顔でトイレから帰還すると、「一度片付けるか」と洗い物を始める。
この男は思ったら即行動だから、僕も慌てて鍋や汚れた小鉢を運ぶ。
「おまえらは座っててていいぞ」
関本は動く事が億劫ではない男だ。
僕は仕方なくテレビの前に戻って、内容なんて全く分からない画面を斜に見る。工藤はあれから全くしゃべらない。キッチンに関本がいるとは分かっているが、僕らを包む空間は、それは、それは、居心地が悪いものになった。
どうすんだよ、この空気。
「酔ったのか？」
なにか話しかけなければならないような気がして、僕は工藤を見る。
「いや」
僕を見ようともせずに、壁に凭れたまま足を投げ出して腕を組みながら煙草を吸っている。関本の発言を反芻しているんだろうな、きっと。
この状況はあまり好ましくない。冗談だとは思うが、関本が僕を可愛いと言ったのは事実で、それによって工藤が嫉妬をする。せっかくどこかに落ち着かせようとしたやっかいな感情が、関本の不用意な一言でまた噴出したわけだ。
工藤は今必死になっている。
ごめん、僕にはどうにもできない。
適当な言葉も、この場の雰囲気を取り繕う術も浮かばないから、ただひたすらテレビに集中したふりで遣り過ごす。
「一之瀬、酒置いてないのか？」

台所で関本がごそごそしながら物色をしている。
「ビールしかないよ」
僕は膝を突いた姿勢で台所に身体を乗り出しながら、関本に声を掛ける。
「ビールは腹いっぱいって感じだな。俺の部屋から取っておきのウイスキーを持ってくるか」
「俺、そんなに飲めないからいいよ」
「アホか、俺が飲みたいんだよ。工藤も飲めるだろ」
そう言うと関本はバタバタと廊下を走って行く。
バカ、二人きりにするなよ。
玄関に消える関本を見つめて、がっくりと肩を落とす。
その時視界の隅で影が動いた。なんだろうと思った途端、僕は後ろから工藤に抱きしめられていた。
「一之瀬」
あの囁くような声で僕の名前を呼ぶ。切羽詰ったその声に僕は身体が竦んだ。こんな事があるかもしれないと最初に警戒はしていたが、すっかり気が緩んでいた。
彼の顔が僕の首筋に埋まる。ゾクリとする感覚。
一瞬だけ彼の唇が僕に触れたかもしれない。でも錯覚だったかもしれないと感じるぐらいの、微かな感触が僕の首筋をチクチクとさせた。
関本も戻ってくるし、これ以上の振る舞いを彼がするとは思わなかった。それ位の信頼関係はまだあると信じたい。そんな思いで、廻された腕にそっと触れた。
「関本、帰ってくるぞ」
意外と冷静な声が出せた。
「そうだな」
彼もゆっくりと腕を解く。
「気が済んだか」
僕は顔さえまともに見られず、背を向けたままだった。

「やっぱり男なんだよな」
苦笑ともとれるような微かな笑いが悲しげに聞こえた。
「分かっただろう、これで。それでもまだ俺に触れたいとか思うのか」
工藤の気配が真後ろから消える。僕は緊張した身体をゆっくりと解くと、両手をついてそのまま振り返って座り込む。
工藤はまるで何事もなかったかのように壁に背を凭れた状態でそこにいた。
火のついたままの煙草を灰皿から取り上げると、深く吸って遠くへ吐きだす。
「まいったな、俺にはこう言うことも普通にできるらしい」
白い煙越しに僕を見る。
「こんな事はやめてくれ」
彼は、悲しい眼をした。僕の一言が彼を酷く傷付けたような気がして、胸が詰まる。
「おまえを困らせてるんだろうな。それは分かってるんだ」
そんな事は百も承知だと言う顔で辛そうに僕を見る。彼は今友達の境界線を易々と越えてきた。僕がその一歩を許してしまったのか。不用意に車に乗って、不用意に家に上げるような状況を作るべきではなかったのかもしれない。
唯こんな事があっても、僕は工藤と言う友人を失いたくない。それだけは確かだ。
このまま友人であり続ける事はそんなに難しい事なのか。工藤が越えてきた境界線は、僕にはとても越えられそうにない。

11

その夜、二人は僕の部屋に泊まった。かなり飲んでいたし、僕らの宴会は深夜まで続いていたから、それから工藤が車を運転して帰るのは不可能だった。

実は、途中からあまり覚えていない。

とにかくあんな事があった以上は、飲まずには居られない精神状態だった。

関本が持ち込んだウイスキーは、名前は知っているが飲んだ事もない高級酒だった。喉が焼けることも無く、危ないぐらいにスイスイと飲めてしまう。

半分自棄酒に近かった。

酔うと僕がどうなるかと言うと、かなり陽気になってしゃべり倒し、挙句の果てにはどこにでも寝てしまう。

気がついた時は自分のベッドだった。どうやってそこまで辿り着いたのか記憶にはないが、服を着たままベッドに転がっていた。

時計を見ると、明け方の5時。

着ていた服を脱ぎ捨て、Tシャツとパンツ一つで、もう一度睡眠を貪る。僕の頭には関本と工藤がどうなったかなんて、全く考えが及ばなかった。

起き出したのは7時過ぎ。どんなに遅くまで飲んで帰っても、だいたいこの時間には眼が覚める。

ベッドを抜け出し、ドアを開けると、台所に誰かの気配。

「おはよう」

そう言って振り返ったのは工藤だった。ゆっくりと記憶が戻って来る。

「関本は？」

「もう一度寝直すって今さっき帰って行ったよ。勝手に毛布借りたけど」

「寒むくなかったか？」
「一緒に寝るって手もあったんだけどな」
工藤はニヤリと笑う。そんな風に言えるだけどこか吹っ切れたんだろうか。起きぬけのぼおっとした頭には、この際どい会話さえ現実味をもたない。
「笑えない冗談だな」
あくびと共にぽつりと呟く。
「そうだな」
工藤はクスクスと笑いだす。
僕は二日酔いの常で、頭も身体もほぼ休止状態。
「一之瀬、シャワー浴びたらどうだ？　その間に珈琲入れておくから」
「そうする」
あんまり知恵の回らない頭で風呂場に行き、何も考えないままシャワーに頭を突っ込んだ。
少しずつ頭がスッキリとしてくる。
どうやら昨晩は彼が夜這いを掛けることもなく、僕は貞操の危機には至らなかったようだ。
さて、どうしたもんかな。
シャワーの下であれこれ、考えに耽る。
そして、結局は僕が考えても仕方がない事だと思った。僕のスタンスはあくまでも同期であり友人であり、それ以上でも以下でもない。
だから、彼が自分の気持にどう折り合いをつけるか。
僕はできるだけ今まで通り、普通に接するしかないだろう。
この普通って事が不器用な僕には結構難しい。
シャワーを浴びて幾分頭がスッキリすると、あられもない恰好で彼の前に現れるのはまずいと言う意識も働きだす。さっきは結構際どい事をしていたのだと気が付く。
僕は風呂場からバスタオル一枚で、こそ泥のようにベッドルーム

へ駆け込む。取り敢えずスウエットの上下を来て、バスタオルを首に引っかけて、台所に戻る。
僕の家の台所は４畳ぐらい。冷蔵庫や食器棚。弁当をチンするのに大活躍のオーブンレンジなんかが置いてあって、二人用の小さな珈琲テーブルぐらいしか置けない。
彼がそこへできたての珈琲を置くから、僕はそこへ座る。もちろん彼も向かいに座るわけだ。
この距離、結構デンジャラスゾーンだと思う。
珈琲を一口啜って何気に彼を見つめる。
なんか一夜明けた恋人同士のようじゃないか。
僕はまたそんな愚かな考えに捉われ始める。見つめあったりしたら危ない。
慌てて視線を逸らす。
「ちょっとはスッキリした顔になったな」
「そんなに酷いか？」
彼は唇を上げるあの笑い方で僕を見る。あんな状態で雑魚寝をしたとは思えないぐらい、いつもの清潔感溢れる彼がいた。僕は逆光になった彼を少し眩しい眼をして見つめた。
ひらりと彼の手が伸びる。
僕は一瞬息を詰めて固まる。
彼の手は、まだ湿ったままの僕の前髪にそっと触れた。
「柔らかいんだな」
僕の髪の感触を確かめるようにくしゃくしゃと？んでから放す。
これは友人として有りか否か？　僕は自分に問いかける。
決して、僕が嫌悪するような行為ではなかった。それでも好きだと告白した彼には、どこか意味のある触れ方だと思わずにいられなかった。
僕はいちいちそんな事を考えながら、これからこいつと付き合うんだろうか？
なんて、やっかいな関係になってしまったんだろう。

「一之瀬、そろそろ散髪いけよ」
彼はそう言って立ち上がった。
「帰るよ」
「うん」
引止めはしない。僕は十分疲れている。
こいつが帰ったら、もう一回寝直すつもりだ。
「いいよ、カップは洗っとくから」
「悪いな」
彼は玄関に向かう。
僕も一応お見送りでその後について行く。
「ここでいいよ」
「下まで行くかよ、バカ」
なんとなく憎まれ口を叩く。
狭い玄関で工藤が体を屈めて靴を履く。気を利かせたつもりでその上から身を乗り出して玄関の鍵を開けてやる。
これは本当に、出会い頭の事故のような状況だった。
たまたま彼が立ち上がって振り返るのと、僕が扉から身体を戻すそのタイミングが悪かった。ちょっとぶつかりそうになり、僕らは同時にドキリとしてその場に凍りついた。
人は常に、他人と一定の距離を持って接している。赤の他人が必要以上に近付いて着たら、危ない奴だと警戒する。友達の距離、恋人同士の距離。それに照らすと、この状況は僕にとっては警戒に値する距離だった。だから僕は必要以上に緊張した。
今までだって、彼ともっと近くに寄り添った経験がないわけではない。たとえばパソコンの画面を見ていて、肩越しにそれを覗くとか。飲んだ帰りにうっかりと寝込んで彼の肩を借りるとか。
でも、それは彼を友達だと思うからできていた事であって、彼の気持ちを知ってしまった今は、その距離の近さは僕にとっては危険な領域だった。
どうして彼の眼を見てしまったのだろう。僕は後々もその事がず

っと悔やまれた。まるで眼を逸らした方が負けだと言うように、彼も僕をじっと見るから、真剣勝負の侍のように膠着した状態になる。
決していきなりではなかった。逃げようと思えば逃げられるだけの時間はあったと思う。その証拠に、彼はゆっくりと僕に近付いて来た。
あ、来るな。
頭の片隅で、彼が僕に何をするのか当に気がついていた。
僕らの周りの時間がゆっくりと流れる。人間は危険と直面すると、それから回避したいが為に時間の感覚を遅らせる事が出来るのかもしれない。
最初に感じたのは彼がつけているフレグランスの香り。息をするのも忘れた唇に、ひんやりとした少し湿っぽい彼の唇が触れる。その瞬間、僕は眼を閉じてそれを許していた。
触れるだけのぎこちないキス。
その感触より、撲を包み込む彼の香りの記憶の方が鮮烈だった。
男と始めてのキス。
僕の頭はからっぽになる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8203x/

同期

2011年12月18日11時46分発行